

寄り添いから生まれる患者の変化 在宅専門診療所でかなう「食べる楽しみ」

医療法人 ゆうの森

(愛媛県松山市)

病院や施設で、医療従事者が患者とかわりをもつ時、もう一段上の「寄り添う」という思いで接することも多いだろう。この「寄り添う」がもつ意味について、最期まで食べる取り組みを行っている医療法人ゆうの森「たんぼクリニック」の管理栄養士3人に尋ねた。

食べられるという希望をともし食支援

本誌の連載でお馴染みの医療法人ゆうの森は、複数の診療所や介護サービス事業所などを運営している。なかでも「たんぼクリニック」は、在宅医療を主体とする有床の診療所だ。年間200件以上にも及ぶ在宅での看取りを行っており、終末期の患者や家族の思いを尊重した医療を提供している。

同院には、患者が食べたいと思っている料理を適した食形態にして提供する「kanauプロジェクト」という食支援がある。この食支援のもと、円滑な多職種連携で口から食べたいと願う患者や家族の希望をかなえた3つの症例から、「寄り添う」の意味を考える。

経口摂取が生きる活力に

廃用症候群で嚥下困難が見られる87歳の男性。在宅移行目的で同院に転院した時は絶食で点滴の状態にあった。嚥下内視鏡検査(V

E)では誤嚥リスクが見られたものの、言語聴覚士や医師のもとで慎重に直接訓練を進めていくとむせずに摂取できたという。

終末期に点滴を投与すると腹水や胸水、むくみが増え、呼吸が苦しくなるなどの症状や誤嚥性肺炎のリスクも高まることがある。本症例患者においては「食に興味がない、食べたいものはない」と言われることもあったが、点滴でしっかりと栄養が入っていたためだと考えられた。そこで、投与量を徐々に減らして止めるという医師の確かな判断により経口摂取が進んで食形態もアップ、kanauプロジェクトで好物の甘味も提供した。そして、1カ月の入院期間のうちには普通の食事がとれるほどに回復して退院したという。

同院管理栄養士の松井百合さんは、「この男性は現在では調理を含めほぼ自立し、『もつと体力をつけて趣味の能面づくり再開』を目標に、当院の訪問リハビリや訪問栄養食事指導をととても楽しみに



左から、管理栄養士の松井百合さん、橋本慶子さん、越智みつぎさん

されています。ご家族も、『たんぼクリニックだからこそ、口から食べてこれほど元気になった』と喜ばれています」と語る。

松井さんは、「みるみる元気になっていく姿を見て、口から食べることが生きる活力になると再認識しました。1日でも長く自宅で穏やかに過ごしたいと願う方は多いです。これからも管理栄養士を含め多職種で、患者さんの願いをかなえていきたい」と考えている。

「お姉さん」と呼ばれる信頼関係

同じく管理栄養士の橋本慶子さんには、Mさんという忘れられない80代の女性患者がいる。高度視覚障害や高度難聴、重度の糖尿病に加え、肝がん、結腸がんの術後

などさまざまな疾患を抱えている。サポートしてくれる人がいない独居であり、車いすであっても自分のことは自分でやりたいという頑固な性格で、一般的に困難事例と言われる患者である。

「引き継ぎで前任者とご自宅を訪問しましたが、後任の私を受け入れる様子はありませんでした。それでも何度も訪問して、明かりをつけたり車いすの移乗をサポートしたりするうちに心を開いてくれました」（橋本さん）

ある時、デイサービスに来る移動販売車のおはぎを食べたいが我慢していると聞き、kanauプロジェクトで低糖質の甘味料を使って調理、持参した。「おいしいね、ありがとう。ありがとう」と繰り返し礼を述べ、食べ終わった皿にお湯を注ぎ、お汁粉のようにして飲み干していたという。

ケアマネジャーやヘルパーから賞味期限の管理が難しそうだと情報が入った時には、冷蔵庫の食品を確認した。了承を得ながら仕分けしている、かびの生えた干し柿があった。「干し柿はお湯を通してかびを取ればいいんやけん、簡単に捨てられんよ（捨ててはいけない）。大事な保存食なんよ」と言われたという。橋本さんは、食

品や購入品一つひとつに思い入れがあるのに機械的に仕分けしようとしたことにハツとした。

Mさんは管理栄養士という職種をあまり理解しておらず、自宅の清掃や話し相手などもする橋本さんを、親しみを込めて「お姉さん」と呼んだ。橋本さんは、訪問で得た情報を逐一カルテに記録して多職種で共有し、円滑に進めるための手立てとした。

「病気だけでなく患者さんの生活や背景を見て敬意をもってかわることは、当法人の理事長から教わってきた医療従事者としての揺るぎない基本理念です。困難事例の患者さんが安心できるよう、生活のサポートに近いところから始める」と少しずつ受け入れてくれるように思います。信頼関係への第一歩です」（橋本さん）

最期の場所に 選ばれたらどうしたい

「極めて予後不良な悪性リンパ腫の患者、Nさん（71歳）は友人のお母さんでした」と語るのは、管理栄養士の越智みづきさん。以前勤務していた病院では多くの患者とかわかったが、毎日時間に追われた。たんぼぼクリニクなら一人ひとりにじっくり向き合えると入職し

た矢先、Nさんの担当になった。

この時すでに予後は1カ月程度と考えられ、家族からは「少しでも一緒に過ごしたい、食べることも好きな母に最期まで食べたいものを食べてもらいたい」との希望があった。

そこで、kanauプロジェクトの希望をうかがうと「たくさんあつて悩む」とのこと。日を改めて尋ねると「インスタ映えるサンドイッチ」に決まり、好みの具材はさんだ野菜サンドやフルーツサンドを提供した。「おいしい！大満足！」と、にこやかな表情で家族と写真を撮ったという。

キーパーソンであった友人の妹（Nさんの次女）の子どもが幼く、転居もあつて、Nさんは訪問診療と入院を繰り返したが、常に夫や娘二人が手厚くサポートした。越智さんは、「徐々に食事が落ちたものの、亡くなる2時間前まで食べられていたことにご家族は喜んでおられました」と振り返る。

友人の母の看取り期を経験した越智さんは、「友人から『たんぼぼさんを母の最期の場所にしてよかったです』と言葉をかけられました。私たちの仕事の原点とも言える、食べることを大切にしている食事に込めて、これからも患者さ

んやご家族に寄り添いたい」と考えている。

「寄り添う」は永遠のテーマ

3人の管理栄養士は、「私たちだけで解決の糸口を探すのではなく、相談したりアドバイスをもらえたりする他職種がすぐ側について、密に連携をとれるのが当院の特徴でもあります。最期まで食のサポートを行い、患者さんやご家族の思いを尊重してかわわってきたい」と話す。

さらに橋本さんは、「寄り添う」意味は、患者さんによって異なるため、答えを探し続ける永遠のテーマですが、これまでに感じていることは『患者さんの心を受け止める気持ちをもって自分がそこに存在する』ということ。専門職として引き出しを多くもち、問題に気づいた時、患者さんが明るい気持ちで続けられることが何であるかをともに考え、決して諦めないで一緒に取り組んでいきたい」と確固たる思いを語ってくれた。

親身になって患者や家族の置かれている状況を理解し、希望の実現につながるためには何をすればいいのか、とことん考える。ゆうの森が取り組む「寄り添い」の姿が示されている。